

史跡富田城跡

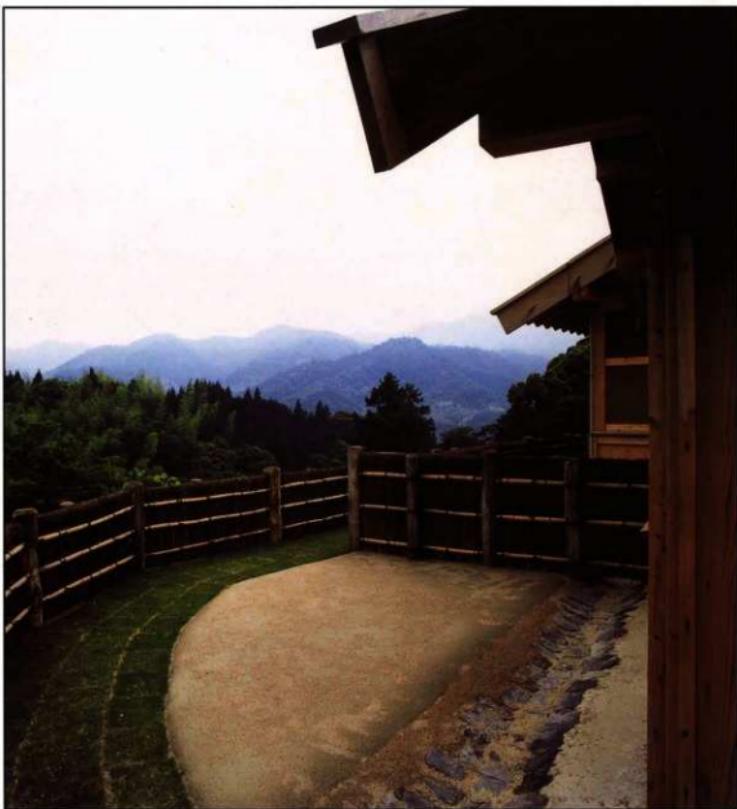
THE TODA CASTLE RUINS

環境整備事業報告書



平成 9 年 3 月

島根県広瀬町



史跡富田城跡

THE TODA CASTLE RUINS

環境整備事業報告書

平成9年3月

島根県広瀬町

史跡富田城跡環境整備事業報告書
(正誤表)

ページ・行	誤	正
序 5行目より	伝えていきます。	伝えてきています。
例言3 1行	石井悠 (鳥取県文化財指導委員)	石井悠 (鳥取県文化財保護指導委員)
P 29		
■史跡等特別事業 「ふるさと歴史の広場」で目標とした事業内容と範囲 整備箇所内		
P 30		
■保存修理事業(平成3・4年度) 調査箇所内		
■史跡等活用特別事業 (平成5~8年度) 表中内	花ノ塙	花ノ壇
P 32		
○平成3・4年度事業 位置図内		
P 34		
○平成5年度事業 位置図内		
P 36		
○平成6年度事業 位置図内		
P 38		
○平成7年度事業 位置図内		
P 79 3行目	約10、程度南側より	約10cm程度南側より
P 80 3) 遺物 5行目	第。調査区	第VI調査区
P 96 3) 遺物 出上遺物 1行目	南蛮形	南蛮系
P 100 4-1.歴史的建造物等整備工事 1)通路、虎口 a. 花ノ壇 14行目	鋪装	舗装
P 159 図中	歴史民族資料館	歴史民俗資料館



月山遠景



月山遠景



月山遠景



山中御殿全景



山中御殿相坂階段



山中御殿全景



山中御殿石垣（菅谷口側）



三ノ丸虎口跡（山頂部）



三ノ丸下帯曲輪（山頂部）



二ノ丸虎口跡（山頂部）



二ノ丸南側帯曲輪跡（山頂部）



花ノ壇全景



花ノ壇/建物



縄張全体模型 / 入口広場



遺構露出展示 / 花ノ壇下通路



主屋



建物内観 / 侍所



建物内観 / 主屋



通路跡より花ノ壇を望む

序

9

広瀬町は、山紫水明に恵まれた自然景観と数多くの歴史的遺産、そして先人達が嘗々と築きあげた優れた伝統の技などにつつまれています。個性を活かした町づくりの基本もここにあると確信しています。特に、史跡富田城跡は町のシンボルとして、またかけがえのない歴史的文化遺産として守り伝えていきます。

近江源氏の流れをくむ尼子氏が170年間6代にわたって築きあげた富田城は、永禄9年（1566年）毛利氏に明け渡し、さらに堀尾吉晴が慶長16年（1611年）松江に城を移して以来、長い年月が経過するなかで、石垣は崩れ城としての形がわからなくなってしまいました。尼子氏が滅んでちょうど100年後の寛文6年（1666年）、松江松平藩の支藩として広瀬藩が創設され城下町はある程度の活気を取り戻しますが、富田城は二度と使われることは有りませんでした。

そこで広瀬町では、この歴史的遺産をもっと身近な親しみやすい保存・公開するための大史跡公園整備計画を平成2年度にまとめ、平成5年度から平成8年度にかけて実施してまいりました整備工事が一応の完成をみました。ここに将来の参考に資するために、整備に至る経過や工事の概要、発掘調査の結果を報告書として取りまとめた次第であります。

最後に、この整備事業にあたり、快く公有化にご協力いただきました地権者の方々をはじめ、懇切なご指導を賜りました文化庁文化財保護部記念物課、島根県教育委員会文化財課の先生方、また関係の皆様方に衷心より御礼申し上げます。

平成9年 3月

広瀬町教育委員会
教育長 喜多川 忠

例　　言

1. 本書は、平成2年度に策定された、史跡富田城跡総合整備計画を受け、広瀬町教育委員会が平成5年度から8年度まで、史跡等活用特別整備事業「ふるさと歴史の広場」の指定を受け、4年間実施した史跡富田城跡の遺構確認調査並びに整備報告書である。

なお、本書には、整備事業着手前に実施した史跡富田城跡の遺構確認調査の成果も含まれている。

2. 事業は、以下の体制で行った。

調査主体 広瀬町教育委員会

調査指導 田中 哲雄（文化庁文化財保護部記念物課主任調査官）

伊藤 正義（　　文化財調査官）

本中 真（　　文化財調査官）

五味 康重（財團法人文化財建造物保存技術協会参与）

村上 勇（広島県立美術館主任学芸員）

勝部 昭（鳥根県教育委員会文化財課長）

川原 和人（平成5年度～文化財課主幹）

（平成6・7年度～埋蔵文化財係主幹）

西山 彰（平成6～8年度～文化財係長）

萩 雅人（平成7・8年度～文化財保護主事）

事務局 喜多川 忠（広瀬町教育委員会教育長）

小藤富三保（平成5・6年度～教育次長）

平井六四郎（平成7・8年度～）

鴨木 収生（平成5年度～社会教育課長）

加藤 清光（平成6年度～）

田中 幸子（平成5年度～生涯学習係長）

田中 秀子（平成6～8年度～）

竹中 哲（平成5～8年度～文化体育係長）

内田 雅巳（平成5年度～文化体育係主任主事）

祖田 畏（平成6～8年度～文化体育係主任）

調査員 竹中 哲、内田 雅巳

作業員 岩田 博道、山岡 幸雄、仙田 茂通、祖田 光、近藤 好吉、萩原 嘉義、

新井 郁夫、山崎 荘一、横山 直樹

3. 調査にあたっては、地元各位の協力があり、石井悠（鳥根県文化財指導委員）、西尾克己（鳥根県教育委員会文化財課係長）、藤原良久（広瀬町文化財専門委員）外、諸氏にご助力をいただいた。

記して、謝意を表する次第である。

4. 遺物整理には、調査員・調査補助員の他に、次のものが参加して行った。

富沢アツ子、稻田安恵、稻田ゆかり、田部圭子、岩見由紀子

5. 掲載図面は、竹中哲、内田雅巳、祖田昇、富沢アツ子、稻田安恵、稻田ゆかり、岩見由紀子の作図・製図にかかり、写真は竹中・内田・祖田の撮影によるものである。

6. 本書の編集及び執筆は、諸氏の協力を得て、竹中・内田が行った。

7. 実測図の方位は、事業実施時における磁北である。

8. 本整備の設計及び管理は、株式会社文化財保存計画協会に委託して行った。

9. 出土遺物は、広瀬町教育委員会で保管している。

・巻頭カラー写真図版

- ・序文
- ・例言
- ・目次

第1章. 富田城跡概要

1-1. 富田城の歴史	1
1-2. 造構の特色	5
・曲輪の配置	5
1-3. 造構の現状	7
・造構の残存と破損	7
・現況写真	10

第2章. 整備事業計画

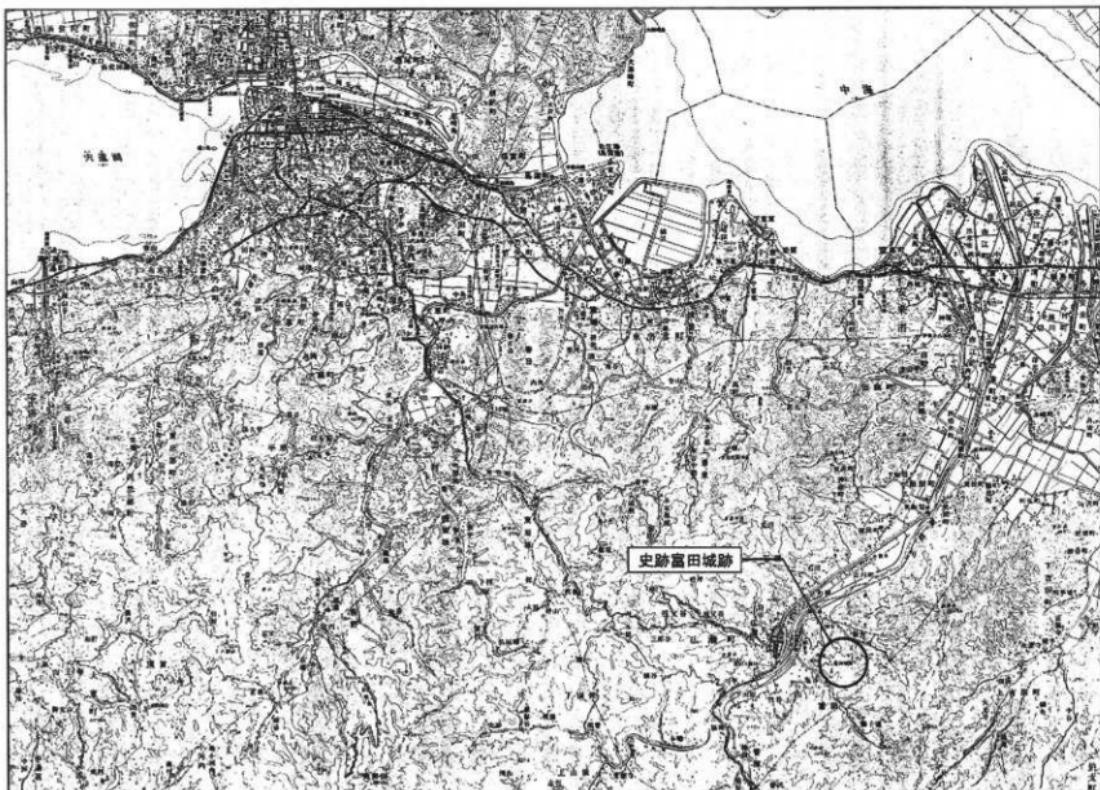
2-1. 目的及び方針	17
・調査、整備方針	18
2-2. 計画	20
・整備範囲の確定	20
・短期整備	21
・長期整備	21
2-3. 事業経過	27
・事業着手と史跡等特別事業 「ふるさと歴史の広場」事業	27
・史跡等特別事業「ふるさと歴史の広場」 で目標とした事業内容と範囲	29
・組織	29
・平成3、4年度事業	31
・平成5年度事業	33
・平成6年度事業	35
・平成7年度事業	37
・平成8年度事業	39

第3章. 発掘調査概要

3-1. 発掘調査	41
・千畳平	42
・太鼓壇	46
・奥書院	47
・花ノ壇	50
・山中御殿	71
・七曲り	85
・三ノ丸	87
・二ノ丸	92

第4章. 整備工事

整備工事概要	99
4-1. 歴史的建造物等整備工事	100
1) 通路、虎口形態	100
a. 花ノ壇	100
b. 山中御殿	106
c. 山頂部	116
2) 曲輪内整備工	129
- 建物復元工	
4-2. 造構露出展示	143
4-3. 繩張全体模型	158
4-4. その他の整備	162
- 便益施設	
- 休憩施設	
- 案内板、順路標等	



[位置案内図 S=1/100,000]

1 章 . 富田城跡概要

1-1. 富田城の歴史

1-2. 遺構の特色

1-3. 遺構の現状

1章. 富田城跡概要

1-1. 富田城の歴史

最初にこの地に城を構えたのは、12世紀の中頃平宗清が平盛の命を受け富田城を築いたという説や、12世紀後半源頼朝により出雲の守護として任命された佐々木義清の居館が始まる説など諸説が存在するが、いずれにしろ12世紀後半には富田の地に何らかの城館が造られていたのは確かである。築城より江戸初期までの約400年の間、富田城は幾多の変遷を繰り返すこととなる。

出雲の守護佐々木氏の四代目頼泰は居城を塩治（現出雲市）大庭城に移し、富田城に守護代を置いた。しかし六代目守護であった高貞は因幡伯耆の守護山名時氏の攻めを受け切腹する。高貞の亡きあと、将軍足利尊氏は出雲の守護に佐々木高氏（道誉）を任命し、守護代には吉田秀仲を置いた。しかし領主拡大をもくろむ山名氏は正平7年（1352）佐々木氏に背き、守護代吉田氏を追放し、代わって塩治秀貞を置いた。その後数々の功により日本全国の六分の一、11ヶ国にも及ぶ領土を有するほど山名氏の勢力は強大なものとなつた。しかしかねてより山名氏の勢力増大を厭しく思っていた將軍足利義満は山名氏への追撃を繰り返し、遂には明徳の乱（元仲8年/1391）で山名氏を倒した。その後出雲の守護には明徳の乱で戦功のあった京極高誥を任命し、守護代にはその一族尼子持久を置いた。富田城の守護代は持久の子尼子清定へと続くが、京極氏に追われ、一旦は塩治掃部介が守護代を勤めるが、その2年後天文18年、清定の子経久が富田城を奪回した。狹少の土地から身をおこした経久であったが、天文年間に因幡、石見、備後など11州の太守となり、尼子の全盛時代を焼きあげた。こうして尼子氏は独立した富田城の城主として経久、政久、晴久、義久へと約80年もの間続き、富田城は戦国大名尼子氏の居城として城地の支配の中心となつた。

しかし永禄8年（1565）、毛利氏は月山を三面から攻めたが、月山富田城がいかに堅く、尼子の兵がなお強壯であるのを知り、月山への糧道を断つことで尼子氏を窮地に追い込んだ。毛利氏に攻められた尼子義久は1年半にも及ぶ籠城の末、遂に富田城を毛利氏に開城し義久自身は長田の円明寺に幽閉の身となつた。その後尼子氏の名武将山中鹿介は再び富田城奪回を試みるがあえなく失敗におわり、遂に尼子氏は滅亡する。

慶長5年（1600）関ヶ原の戦いで、徳川家に敗れた毛利氏は富田城を追われ、代わって徳川家康は遠江浜松より堀尾吉晴を富田城に配した。しかし堀尾吉晴は富田城が出雲支配には政治上、軍事上ともに適さないことを理由に、慶長16年（1611）松江城の完成を待つて、中心を富田城より松江城へ移した。400年もの間、難攻不落と称された名城月山富田城もこの時を以て廃城となつた。

■年表

時代	城主		年代	主な出来事
	守護	城主		
鎌倉時代	佐々木	吉田泰仲	文治元-1185	源頼朝鎌倉幕府を起こす
			建久3-1192	近江源氏佐々木義清出雲隨岐の守護に任せられ富田に居を構える
			弘安元-1278	四代目頼泰の時、塙治の大庭城に居を移し富田には守護代を置く
			建武元-1334	建武の新政
南北朝時代	佐々木	吉田泰仲	建武元-1338	足利尊氏征夷大將軍になる
			興国2-1341	塙谷氏山名氏に滅される
			正平7-1352	佐々木守護吉田泰仲を守護代とする 山名氏佐々木氏により出雲を奪い守護代に塙治泰貞を置く
			元中8-1391	富田庄で合戦があり岩倉寺焼失する 明徳の乱 山名氏が追放され京極佐々木氏は尼子持久を守護代とする
室町時代	佐々木	尼子	元中9-1392	足利義満南北朝を統一する
			応仁元-1467	応仁の乱始まる
			文明16-1484	尼子経久守護代を追放される
			文明18-1486	尼子経久富田城を奪回し出雲を支配する
戦国時代	尼子	経久 政久 晴久 義久	天文11-1542	大内氏出雲に進攻する
			永禄8-1565	毛利元就富田城を囲む
			永禄8-1566	尼子義久1年の篠城の後富田城を開城す
安土桃山時代	毛利	天野隆重 毛利元就 吉川元康 吉川広家	天正18-1590	豊臣秀吉全国を統一する
			慶長5-1600	関ヶ原の戦い 家康の命を受け堀尾吉晴が富田城に入る
			慶長8-1603	徳川家康征夷大將軍になる
			慶長16-1611	堀尾氏居城を松江に移す
江戸時代	堀尾		寛文6-1666	富田川の洪水により町並みが埋まる 庄瀬藩の成立

■尼子十旗と十砦

尼子氏時代の富田城防御は、富田城を本城としての支配配置に特徴があった。「尼子十旗と尼子十砦」と今に伝えられる有名な支城群と広域的な城砦化である。尼子氏はしだいに力を強めていくと、周辺の勢力（出雲国人衆）を支配に組み込み支城化し、また支配地の拡大とともに、各地に防御上の拠点を置くようになる。これらが十旗・十砦といわれ、出雲部全域にみられる。

●尼子十旗

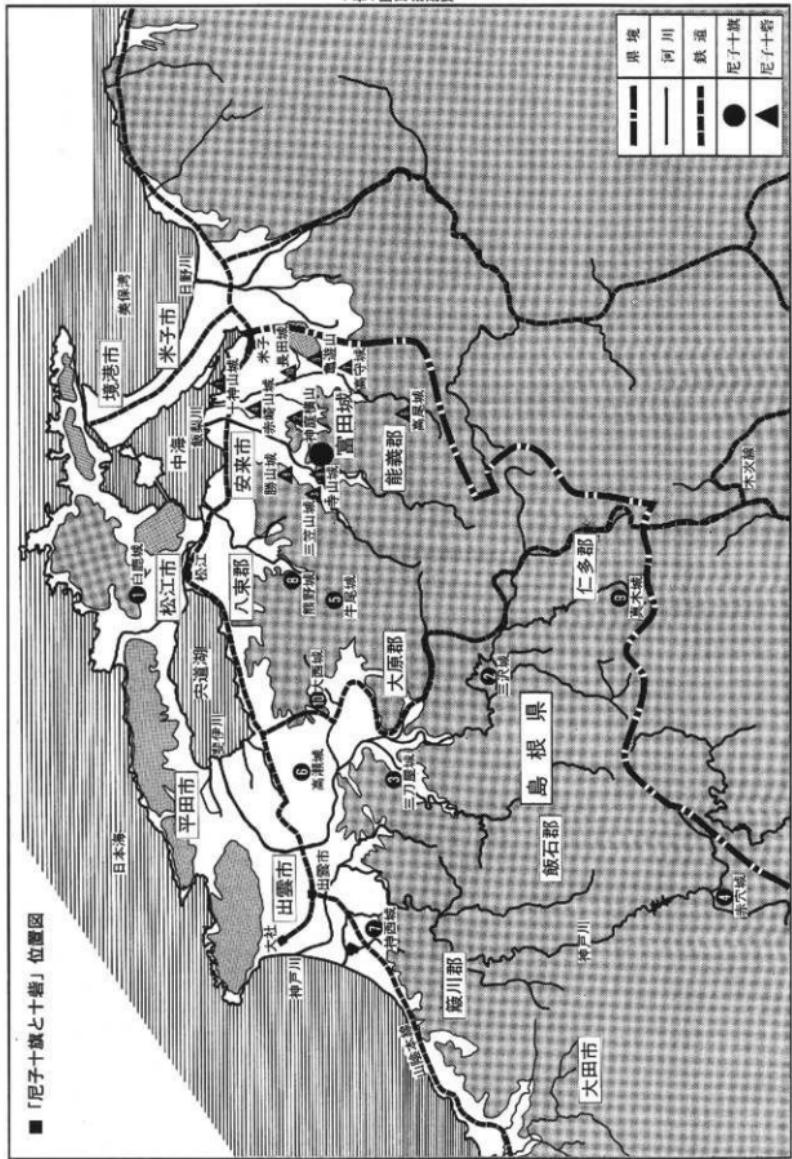
	名 称（別 名）	城 主	所 在 地
第一	白鹿城（白髪）	松田 誠保	松江市法吉町
第二	三沢城（鶴倉城）	三沢 為忠	仁多郡仁多町
第三	三刀屋城（天神丸城）	諫訪部久扶	飯石郡三刀屋町
第四	赤穴城（衣掛城）	佐波 常連	飯石郡赤来町
第五	三笠山城（牛尾城）	牛尾彈正忠	大原郡大東町
第六	高瀬城	米原平内兵衛	簸川郡斐川町
第七	神西城（竹生城）	神西三郎左衛門	出雲市東神西町
第八	熊野城（要害山）	熊野 久家	八束郡八雲村
第九	夕景城（馬木城）	馬木 满綱	仁多郡横田町
第十	高麻城（大西城）	鞍掛 久光	大原郡加茂町

▲尼子十砦

	名 称（別 名）	城 主	所 在 地
第一	十神山城	松尾邊江守	安来市安来町
第二	神庭横山城	川井信濃守	安来市飯梨町
第三	三笠山城	西村治右衛門	能義郡広瀬町
第四	赤崎山城	原民部少輔	安来市赤崎町
第五	亀遊山城	和田源右衛門	能義郡伯太町
第六	高尾山城	足立有馬充	能義郡伯太町
第七	高守城	中井平三兵衛	安来市飯生町
第八	勝山城（滝山城）	田中三良右衛門	能義郡広瀬町
第九	寺山城	福山肥後守	能義郡広瀬町
第十	長田城	福山 綱信	能義郡伯太町

■「尼子十箇七十砦」位置図

1章 富田城概要



1-2. 遺構の特色

■曲輪の配置

富田城跡の城構えの在り方としては、本丸跡などをはじめとする主要な曲輪が位置している月山を中心として、そこから周辺に延びる幾筋もの低丘陵状の尾根上に曲輪群が分布しており、城跡の西側を北方に流れる飯梨川（富田川）を天然の堀として利用し、また城跡の南側には塩谷、北側は新宮谷によって囲まれているため、およそ1.5km四方もの広大な範囲が繩張として構成されている。

現在その大半が樹木に覆われている富田城跡の中で、その状況を見ることができる曲輪跡の代表的なものとしては、月山山頂部の本丸跡、二ノ丸跡、三ノ丸跡や山中御殿跡がある。また、この外に現在公園として広く親しまれている千疊平や太鼓壇、奥書院と呼ばれる曲輪群やお茶庫台、能楽平、大東成などと呼ばれる曲輪群をもつ低丘陵状の尾根が山中御殿跡を起点として派生しているが、これらには尾根の上部を削平加工して、複数の曲輪が階段上に並ぶように設けられている。この外では、月山の北側にも無名の曲輪群が多数見られ、これらも低丘陵状の尾根上に痕跡を残している。

上記のように、現在往時の面影を窺い知ることのできる遺構は、城跡全体の規模から見ればそれほど多くはないのだが、それらの中でも最も重要な要素といえるのは、それぞれの曲輪を繋ぐ往時の通路跡やそれに付随する虎口跡（曲輪の出入口部分）の形態である。それは、広大な繩張の中における比較的大きな谷間を利用した主要な通路跡（御子守口、苦谷口、塩谷口）を中心とする通路から各曲輪への導入形態は決して直線的ではなく、ほとんどのものが曲輪の脇からに入る虎口の形態を有している。また、各曲輪間を結ぶ通路及びその周辺には堀切及び土橋や急峻な尾根を利用して帯曲輪などが緻密かつ巧みに配されており、往時の富田城の防衛態勢の厳重さが窺える。

このように、富田城の全体的な構成の在り方を見ると、広大な繩張内に多数存在する谷を堀あるいは通路として利用しながら、その両側に延びる低丘陵上の尾根上に多数の曲輪や土塁を組み合わせながら配することで防御性を高めており、本来の複雑に入り込んだ自然地形を巧みに活用しながら、それらに手を加えることで、より城としての機能を向上させている。

1章. 富田城概要



1-3. 遺構の現状

■遺構の残存と破損

富田城跡はいくつかの谷地形を大手口、菅谷口、塩谷口、新宮口等として利用され、本丸等を置く月山山頂を中心に周囲へ谷や曲輪が派生している非常に大規模な網張である。

残存する主要な曲輪跡は月山山頂の本丸、二ノ丸、三ノ丸や月山の中腹に比較的広い面積を有する尾根や、また大東成、能楽成、千畠平と呼ばれる曲輪を持った尾根などがある。これらは丘陵地形を削平して段状に造られた堀切などで区画された曲輪群であり、現在でも面影を残す遺構である。その他にも斜面を段状に造成（幾重にも配置された小さな曲輪、通路跡）が多数残存している。

現存する遺構は曲輪跡、堀切、土塁などが確認できるが、曲輪跡は近代に設置された休憩所、遊具、民家、石碑などがあり、またそれ以外の箇所は樹木に覆われておらず、往時の様相を失っている。土塁、堀切などは長期に亘り雨水、浸透水などで損失しており、土塁形状も変形し、それに伴う石垣なども一部良好に残っているものの、崩落や欠損が進み深刻な状況となっている。また、堀切や斜面中腹にある小さな曲輪、通路群の多くは土砂の堆積により埋没し、その表面に樹木が生い茂っている。各箇所の遺物残存状況は次の図に示す通りである。



富田城跡全景

■遺構の残存状況



■遺構破損図





市街地より本丸跡を望む



花ノ壇/曲輪内部



花ノ壇/通路跡から曲輪を望む



山中御殿 / 曲輪内部



山中御殿 / 土壘残存石垣



山中御殿 / 土壘残存石垣



千疊平 / 曲輪内部



太鼓壇 / 曲輪内部



奥書院 / 曲輪内部



花ノ壇下 / 通路跡



奥書院付近 / 通路跡



七曲りから菅谷口を見る / 通路跡



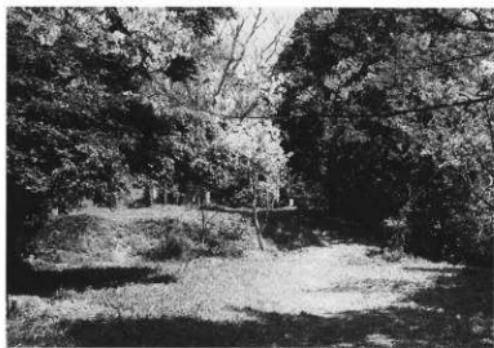
七曲り



三ノ丸石垣調査前状況



二ノ丸南側掘切 / 残存石垣



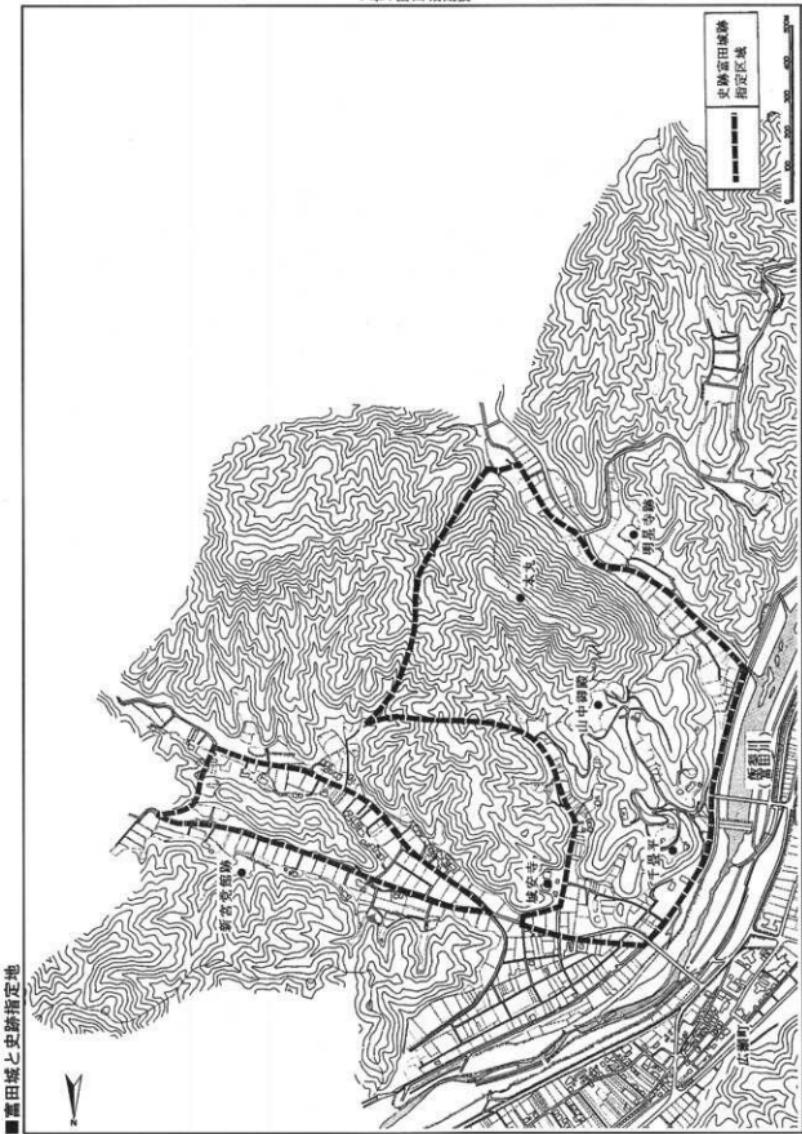
三ノ丸跡から二ノ丸跡を見る



二ノ丸跡 / 曲輪内部



本丸跡 / 曲輪内部



2章. 整備事業計画

2-1. 目的及び方針

2-2. 計画

2-3. 事業経過

2章.整備事業計画

2-1. 目的及び方針

富田城跡は国の史跡として良好に遺構を残す全国屈指の中世城郭である。江戸初期に廃城されるまで、この地方の領地支配の中心として歴史的にも、その綱張においても全国の中世城郭跡を代表するものである。

城跡に残された遺構からは、戦国大名尼子氏から続く戦国時代の城構えが随所に見られ、急峻な月山の頂において本丸跡や月山の回りの幾筋もの尾根に施された曲輪群、また痕跡として残る虎口や堀切、石垣や土塁などはその特徴を示すものである。しかしこのような掛け替えのない財産であり、町民の誇りである富田城跡は、昭和9年の国史跡指定以後において、一部を修理したのみでほとんどは放置されたままである。これらの現状は城跡としての景観を失い、貴重な遺構である石垣や曲輪群は破損を来たし、富田城跡の価値を損なう結果となっている。

一方、富田城跡の公開の現状は、主要な遺構となる曲輪群等の整備が遅れること、また樹木などによって覆われることにより広範囲に及ぶ縄張遺構の理解が妨げられる結果となっている。加えて、説明案内施設の不足、史跡内通路となる園路不足や便益施設等の不備による史跡公開活用がなされていないのが現状である。

このように富田城跡がその貴重な歴史遺産としての価値を失いつつある現状、また町民から城跡の史実を活かしたわかりやすい整備公開が要望され、町民に親しまれる歴史遺産としての早期活用が求められていたことが整備の発端であり、富田城跡の将来にわたる保存と身近な歴史文化財としての活用が今整備の目的である。

■調査、整備方針

広瀬町では史跡富田城跡の保存と活用を主とした整備を実現するためには、昭和63年度及び平成元年度の2ヶ年をかけ、その基本となる整備基本計画を策定し、中世城郭富田城跡の特徴を活かした整備計画案の検討を行った。計画の策定にあたっては、「史跡富田城跡総合整備委員会」を組織し、検討及び協議を加え、また文化庁記念物課、鳥根県教育庁文化財課の指導助言を得た。また「史跡富田城跡整備計画」では、造構の調査確認と造構の恒久的な保存、公開のための施設づくりを挙げ、次の5つをその整備標題として方針を策定した。

1) 造構の保存方針

流土・流失による造構の破損を防ぐため、早期に史跡保存のための関連計画を立案した。破損している造構の保存及び修復を目的とした保存修理計画、史跡指定地の拡大や土地公有化の推進による現状変更への対応、また史跡内容の広報活動を積極的に行い、住民の理解を得ることにより将来的な造構の保存につなげるような施設を早急に計画・立案することが望まれた。

2) 発掘調査の早期着手

主要な曲輪や虎口箇所の表土下には、往時の造構が良好に残存しているものと思われ、建物や門、通路等の痕跡をとどめているものと思われる。そのため造構確認の発掘調査に着手し、整備目的や計画に基づいた造構検出を図る。

3) 分かり易い造構整備

富田城跡の特徴である尾根上に連続して連なる曲輪の形態や、それを区画、継続する堀切や虎口などを整備することにより、視覚的な城跡の再現を図ることを方針とした。曲輪は堀切など法面を整形することによりその輪郭を明らかにし、虎口跡、門、建物や堀、土塁などを復元することにより、より立体的な整備内容とする。将来的には代表的な曲輪跡の全面発掘を行い、当時曲輪内で営まれた生活やそれに関連する建物、施設造構を展示し、修景及び景観整備のための既存樹木の整備や通路跡の復旧などが主要な項目として挙げられる。

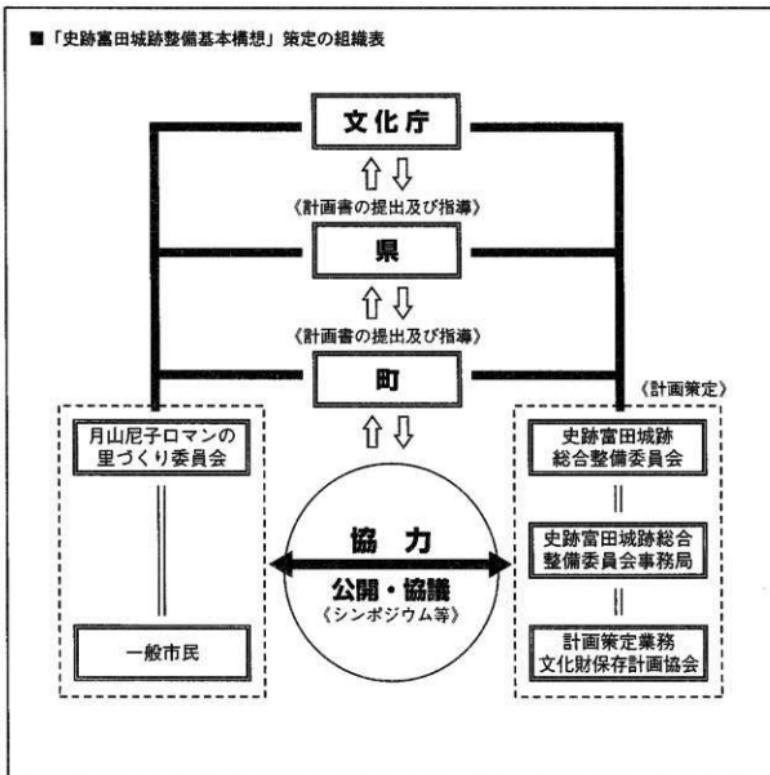
4) 公開施設の充実

施設公開にあたっての公開施設として、全体造構及びその歴史を示す総合案内施設の開設、主要な造構の説明板の配置、また街灯や道順を示す指導標の設置など、全体的な計画に基づいた設置が望まれる。往時の通路跡を園路として活用し、城山全域でのルートの設置が望まれ、それに伴う入口広場の開設や休憩施設やトイレなどの便益施設の適正な配置が望まれる。

5) 事業方針

上記の整備を行う上で将来的な事業内容の検討と、事業計画の早期立案が必要とされた。整備順序の問題、優先順位、調査と構造整備の手順など、公有地化から公開までの一體となった事業計画を立案することが望まれた。

■「史跡富田城跡整備基本構想」策定の組織表



2-2. 計画

■整備範囲の確定

前記整備方針、整備構想を踏まえ、より具体的な整備内容を作成するに当たって、史跡富田城跡の現状からいくつかの課題が挙げられた。

- 1) 富田城跡の範囲があまりにも広域であり、整備公開の段階的な範囲設定が必要であること。
- 2) 現状での遺構分布からは、史跡指定範囲が狭く保存の対象として周辺に残る城跡遺構の史跡指定地への編入・拡大が必要とされる。
- 3) 整備を行う上での遺構調査範囲が狭く、早期調査拡大が求められる。また調査については期間も長くかかり、調査着手と効率的な発掘調査が必要であること。
- 4) 一方では、残存遺構の破損崩落が進んでおり、早期に土地の公有化、また同時に修理等の着手による将来的な保存管理が必要であること。
- 5) また地元住民からは早期に史跡公開が望まれ、身近に親しまれる地元の歴史遺産としての整備公開が強く要望されていること。

これらの状況から整備着手については段階的にならざるをえず、ゾーニングの設定と整備手法の検討が求められた。基本構想からも、その特徴を活かした整備テーマを充足するような計画範囲を設定し、優先的に整備着手することが課題である。短期整備計画範囲では、住民からの要望が高く、富田城跡の特徴を持つ千疊平から太鼓壇、山中御殿跡から本丸跡へ至る経路と曲輪跡の整備を計画範囲とする。長期的整備計画範囲は基本構想で示した城郭遺構範囲を、史跡指定地の拡大等を含めた広域的な整備を行うものとした。

■短期整備**◎通路形態の復旧**

残存遺構から見られるように、堀切を渡る橋や腰曲輪を通路とした導線を整備することにより曲輪を渡る通路を復旧し、併せて通路に繋がる門跡や虎口を整備復旧することにより、当時の特徴的な通路形態の復旧を図る。代表的に整備する門、虎口跡として山中御殿、大手門跡、二ノ丸、本丸御門が挙げられる。

◎景観整備

既存樹木の整備対象としては、三ノ丸、二ノ丸、本丸跡周辺に密生する樹木の整理、花ノ壇周辺の木立・下草など間伐整理の対象とされる。また、視覚的な効果を高めるため千畳平や山中御殿の石垣の上に建つ塀の復元展示、その他主要な曲輪群の範囲の明確化と安全管理のための低木植栽など修景の意図も含めた整備内容が検討される。千畳平や山中御殿の石垣上に遺る矢倉跡を利用した展望施設、当時の建物構造に則した建物の開設を図る。

◎公開施設の充実

説明案内板は耐久性、耐色性に優れた磁器板に焼き付け着色したものを使用し各所に配置する。便益施設としては、トイレ・ベンチ、水飲み場など新たに開設する。

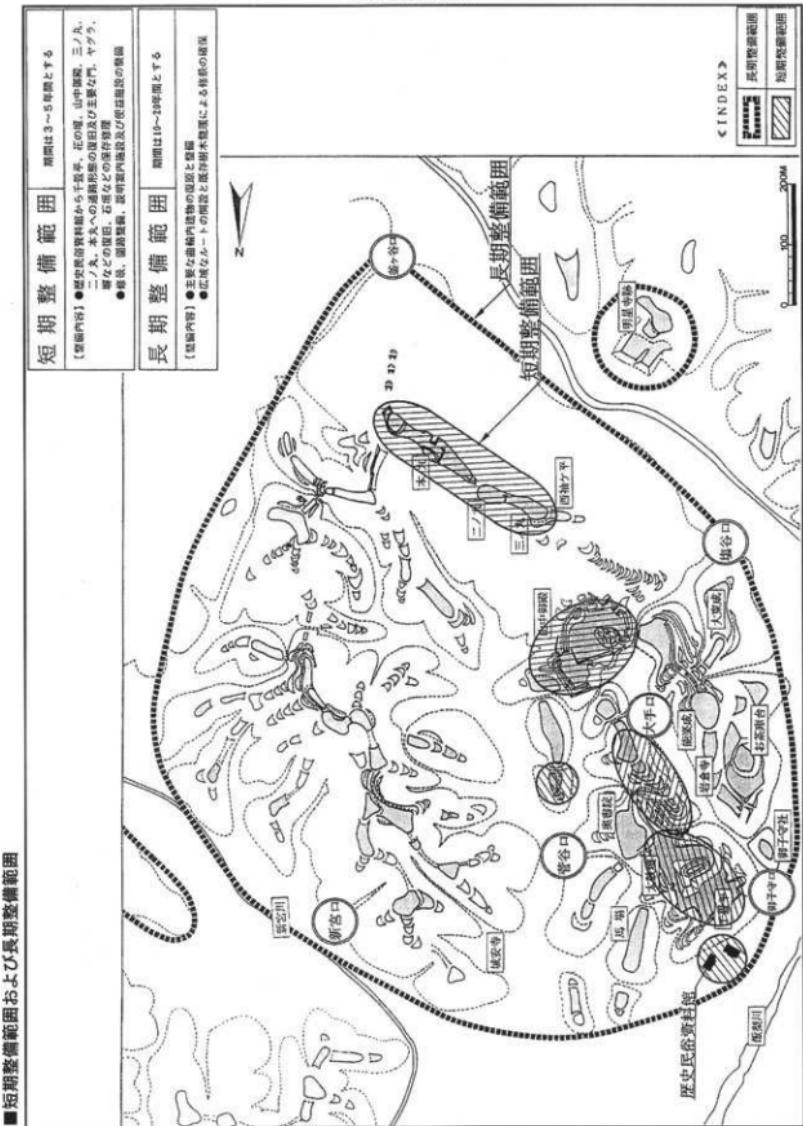
◎歴史民俗資料館

短期整備計画範囲では、富田城跡との関連をさらに強め、調査機能の充実、富田城跡出土品の展示施設の拡充を図る。また資料館前庭など富田城跡入口広場としての活用を図り、総合案内施設の設置や野外模型などの展示をする。

以上、短期整備範囲での目標を示した。事業計画について、これらの整備テーマを基本として、分かり易い遺跡の公開を目指すものである。

■長期整備

富田城跡の範囲は前記した通り、広域であるため、2期、3期と段階的な整備範囲の設定が必要である。基本的な遺構の保存、整備活用方針は短期整備工事区と変わらないが、短期整備範囲を軸に優先順位を設定し、城跡としての景観の再現に有効的な樹木伐採、整理や往時の通路跡を利用した園路整備を先行し、来訪者が繰張の広大さや城跡の構造を実感できるような整備計画の立案を順次行っていく。



■短期整備と長期整備

		短期整備計画	長期整備計画
整備範囲	既設の歴史民俗資料館の拡充を図り、それを起点として千疊平・花ノ壇・山中御殿・三ノ丸・二ノ丸・本丸への導線の開設と主要遺構の整備。	周囲地域に渡る遺構の史跡指定拡大とともに、指定地の公有化を進める。また遺構分布の基礎調査や残存遺構の確認を行い、整備公開の拡大を図る。	
目的	良好に残る遺構も、樹木や石垣の崩落により、史跡としての景観や痕跡が失われつつある。富田城の特徴ある尾根を結ぶ曲輪群を整備公開することにより住民への理解や長期的な整備へのステップとする。	短期的な整備手法を富田城全域で押し進めることにより、社会教育、また歴史教育施設としての充実を図り、より広域的な歴史史料としての公開を目指す。	
整備項目	石垣の崩落を止めるための修理工事やルート開設に伴う門跡の整備。門建物跡やその回りを囲む塀や櫓などを復元し、往時の曲輪を繋ぐ形態や景観を再現する。	広く周囲に分布する遺構の確認及び調査検出をもとに、往時の富田城全域の綱張の再現を目指す。幾つもの尾根に繋がる曲輪群や曲輪内の建物など検討を加えながら再現をする。	
・調査計画	修理に伴う千疊平・山中御殿・二ノ丸の石垣の調査や主要な出入口となる山中御殿跡の門跡の発掘調査及び園路導線の開放に伴う遺構確認。	二ノ丸・三ノ丸など現在においても良好にその痕跡を残す。当時の生活や建物配置など良好な形で地下に埋もれているものと思われ、長期的な展望にたった発掘調査が望まれる。またそれに順する曲輪が他にもあり、調査・検出が望まれる。	
・遺構整備計画	石垣などの修理復元と共に、石垣の上に回る塀なども整備し土塁や埋土している堀切の掘削整備を行う。また調査で検出された門跡などの痕跡については積極的に復元する。	同 左	
・施設整備計画	現在不足している説明板や遺構案内板休憩施設や便益施設など統一的な仕様で計画的に配置する。	同 左	
・資料館等整備計画	整備起点として、前庭などの広場の開放・案内・屋外休憩施設などの充実を図る。	資料館自体の拡充を図るため、建物の拡張・新設を図り、史料の収集・調査研究の博物館的な施設とする。	
	事業年次を3~5年程度として整備を行う。	指定地の買い上げを先行し、調査検討等順次整備公開を進める。	

■短期整備計画

